登山月報　第 497 号　平成 22 年 8 月 15 日発行　　昭和 45 年 12 月 12 日第三種郵便物認可（毎月一回 15 日発行）

登山月報

IFSC 年間チャンピオン …… 1
平成 22 年度指導員総会・研修会 …… 2
平成 22 年度遭対総会・研修会 …… 4
平成 22 年度全山遭対策協議会 …… 5
「道迷い遭難対策」登山における GPS 活用の薦め… 5
新連載 Mountain World 第 21 回 …… 7
BMC Climbing Meet 2010 …… 8
海外登山隊クロニクルザ植村直己デイ… 12
ＪＭＡ、編集後記 …… 13

野口啓代 最終戦で優勝 2 度目の年間チャンピオン！ 堀創も年間 3 位に

７月30、31日、ボルダリングワールドカップ最終戦がミュンヘンで開催された。女子は4名によるタイトル争いが繰り広げられたが、セミファイナルでクロエ・グラフティオとアレックス・ジョンソンが脱落。ファイナルは野口対アンナ・シュテールの宿命の対決となった。セッターの気合が入りすぎたのか課題は異常に難しく、ふたり以外はゼロ完登。そしてひとつの課題を野口は一撃、アンナは二撃となり、野口優勝、同時に年間チャンピオンが決定した。

男子はアダム・オンドラが異次元の力を発揮。20人中14人がゼロ完登というセミファイナルを、なんとただひとり全完登。ファイナルでもただひとりの３完登を決め、こちらも優勝とともに年間チャンピオンとなった。堀はセミファイナル１完登でギリギリ通過。ファイナルではひとつ順位を上げ５位に。みごと年間３位に入賞した。

（競技部常任委員：北山　真、写真：千葉　和浩）

リードワールドカップ開幕 小田桃花 初出場6位、安間佐千は4位

７月12日、13日、シャモニーでリードワールドカップ2010が開幕した。人気の大会ということで日本からも、安間佐千、渡辺数馬、新田龍海、松島暁人、小澤信太、小西大介、小林由佳、小田桃花、大田理裟の９名が参加した。

女子予選は両ルート完登が28名。小林は片方のルートで失敗し、まさかの予選落ち。小田は両完登で通過。セミファイナルではのべ11名が巻き込まれる大ダンゴが発生。小田もここで落ちたが、ぎりぎり通過。ファイナルでは会心のクライミングで６位となった。

予選通過した日本人男子は安間、松島、小澤の３名のみ。小澤はセミで18位、松島は21位。安間は順調にコマを進め、ファイナルで４位となった。アダム・オンドラがまさかのファイナル最下位の９位。圧巻だったのがラモン・ジュリアンで、セミ、ファイナルともにただ一人の完登という「完全試合」を成し遂げた。

（競技部常任委員：北山　真、写真：千葉　和浩）

日本山岳協会　平成 22 年度指導委員総会・研修会報告

日　時　平成22年6月12日（土）～13日（日）
場　所　東京海員会館
参加者　北海道（明田）、岩手（佐藤）、宮城（小山）、秋田（児玉）、山形（菅埜）、福島（下山田、佐々木）茨城（中庭、荒木）、栃木（植木）、群馬（角田、星野）、埼玉（鈴木）、千葉（有地）、神奈川（尾山）、新潟（阿部）、長野（伊澤）、富山（開澤）、石川（亀田）、福井（枡田）、愛知（勝野）、三重（加藤）、岐阜（水谷）、滋賀（松下）、京都（木澤）、兵庫（西嶋）、奈良（前田）、鳥取（渡辺）、岡山（植野）、広島（岡谷、池本）、山口（細川）徳島（原）、愛媛（北尾）、福岡（戸高）、熊本（松村）
指導常任　永井、鈴木、瀧根、小野寺、石原、野村、堀口、瀧本、山本、堤、井納、石倉、蛭田
日山協　田中会長、尾形事務局長

6月12日　司会（堀口常任）
【開会式】
開会の挨拶　日本山岳協会　会長　田中　文男
・指導委員の皆様には日ごろ大変ご苦労いただきありがとうございます。日本山岳協会の中でも、重要な役割を担っている皆様方には今後、更なるご尽力をお願いしたい。
開会にあたり
　日本山岳協会　指導委員長　永井　豊

【報告事項】
＊義務研修全体システム規程・規約集より（石原常任）
・研修完了対象は4.5時間以上であり、研修会では研修参加、講習会では講師での参加であること。日本山岳協会への事前の届出が対象となる。
＊義務研修了書式説明（蛭田常任）
　配布CD-ROMにはパスワード設定。
＊規程・規約集平成22年度版発行について（瀧本常任）
　最近の必要条件に合わせた内容に改定している。
＊主任検定員制度について（野村常任）
　各県の取得状況説明と不在県の状況説明。
＊スポーツクライミング指導者制度について（永井委員長）
＊スポーツクライミング指導者養成講習会について
　国体監督の条件としての必要に応じることもあり、新設した。
　今年度内の日時、場所、内容につき確認。共通科目についても留意して欲しい。
【研　修】
＊最近の氷雪技術研修会の流れについて（瀧根常任）
（スタンディングアックスビレイの変遷について）
・使用器具の変化に対応することが必要になってきている。
＊最近の登攀技術研修会の流れについて（切嶋常任）
＊懸垂下降用のロープの結束強度について（瀧本常任、井納常任）（中間報告）
　引っ張り試験結果と国外の資料により、推奨できる結束方法は、オーバーハンドがあげられるが、次の3点に注意する必要がある。
❶ 結束部を1本ずつ、しっかり締める。
❷ テールは300mm以上残す。
❸ 止め結びを作る（シングルまたはダブル）。

6月13日　総会（司会・瀧根常任）
＊平成21年度指導委員会事業報告（鈴木常任）
＊平成22年度指導委員会事業計画報告（鈴木常任）
・氷雪技術研修は富士山での実施と八ヶ岳も案として考えている。

ネパールに行くなら、
風の旅行社にお任せ下さい。
元々はネパールから始まった風の旅行社。ネパールに支店も構えています。専門知識と経験で、皆様をがっちりサポートいたします。
KAZE
株式会社 風の旅行社
観光庁長官登録旅行業第1382号 日本旅行業協会（JATA）正会員
総合旅行業務取扱管理者　原／小宮山
〒165-0026 東京都中野区新井2-30-4 I.F.Oビル 6F
TEL.0120-987-553　FAX.03-3228-5174
〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田2-5-25 ハービスPLAZA3F
TEL.0120-987-803　FAX.06-6343-7518
URL http://www.kaze-travel.co.jp/　e-mail info@kaze-travel.co.jp

＊平成23年度登攀研修・主任検定員養成講習会開催県の確認（切嶋常任）

・宮城県　開催で県に持ち帰り検討いただく。

＊平成23年度スポーツクライミング指導員・上級指導員養成講習会開催県の確認（井納常任）

・滋賀県・千葉県　候補先として、県に持ち帰り、検討していただく。

＊スポーツクライミング指導者養成講習会について（永井委員長）

・指導経験については、所属山岳会内でのものは除く、指導実績は2年以上としたい。

この件について決定は競技部に一任としたい。

＊規程・規約・オフィシャルブックの改定（瀧本常任）

・別紙中、オフィシャルブック項目と時間の改定。

＊登録更新カードについて（蛭田常任）

・従来、日本山岳協会に更新時提出をお願いしていた本カード（灰色）の日本山岳協会の提出を今後、不要としたい。

（日本体育協会の登録更新システムの完全移行が実施されれば日本山岳協会としては管理できる）

各都道府県で更新時の管理として、活用することは支障ない。

既に、提出済みのカードについては、希望があれば、返却したい。

＊指導員・上級指導員・主任検定員の認定（野村常任）

指導員、上級指導員の検定に当たり、基準としていただきたい事項の説明。

主任検定員の都道府県の分布から見た、今後の養成講習会の開催県の提案。

＊平成22年度（財）日本体育協会体育功労者推薦（案）について（鈴木常任）

・原　秀樹（徳島）、堤　信夫（東京）、渡辺　公二（鳥取）3人を推薦する。

【ブロック別地域意見交換会】

ブロック別に、要望事項、問題点等　忌憚の無い意見交換がなされた。

議題1　指導者養成講習会について、主任検定員不在都道府県の対応について。

各ブロック内で不在県については近隣都道府県の主任検定員が対応するとの返事が多かった。指導常任の派遣も検討。

議題2　義務研修事前申請書の提出について

・未提出都道府県は早急に提出をお願いする。

議題3　指導員　登録・更新カードの扱いについて

・提出分の返却を求めるところ、不要、廃棄を申し出もあった。

議題4　要望、意見、その他

日山協保有のタイヤ落とし用ウインチは責任もって、扱っていただけるのであれば、今後、貸し出しに応じる。

義務研修届出の各都道府県、日山協主催の事業については、有資格者のみ主催者賠償保険が適応される（後援、協力では担保されない）。

主任検定員の不合格者の理由について、（理由については回答する）。

日山協の行事計画を毎年、早めに出して欲しい（都道府県の行事に重ならないようにしたい為）。

公益法人化に伴う諸問題について（今後、随時対応する必要がでてくる）。

指導員制度について一般には、まだ理解されていないのでは今後、活躍の場を広げる為にも検討して欲しい（日山協、日体協ともに今後の問題としていくが、各都道府県でも検討していただきたい）。

ハイキング指導員について（今後の検討課題としている）。

日山協からの委嘱状について、要らないのでは（意見として受け取ります）。

指導員養成講習会について、開催がかなり前で運営が難しい、ソフト面での協力をしてほしい（個別に要請があれば検討します）。

義務研修の修了証の発行等の対応が各都道府県でどうしているのか（証明書、修了書を発行しているところもある、何らかの証明する物は、更新の際の確認としてあったほうが良いとの意見が多かった、都道府県単位では日体協提出用のファイルで管理してほしい）。

【閉会式】

挨　拶　尾形事務局長

平成 22 年度遭難対策委員会研修会兼総会を開催

遭難対策委員会の平成22年度の研修会と総会が神奈川岳連の主管で平成22年6月27日から28日にかけて神奈川大学箱根保養所で開催された。27日は研修会で全体進行は下越田常任委員が行った。西内遭難対策委員長と神奈川岳連の大曽根会長の挨拶で開講し、会場を提供して頂いた神奈川大学の遠征隊長・落合正治さんから神奈川大学のセブンサミットの報告を聞いた。目標を持つことにより山岳部という組織の再生を図りながら単独大学として始めての7大陸最高峰を登頂した過程、エベレスト登頂はかなりきわどい登頂であったとのことで興味深い内容であった。続いて研究協議に入り、遭難事故に関する3つの事例報告があり、その後分科会に分かれ討議した。テーマ1は三重岳連の佐藤さんが鈴鹿山脈を中心に遭難が急増し、山岳遭難防止対策協議会を設立したが課題をかかえているという報告であった。

- 鈴鹿山脈は、高速道路を利用して他県（特に関西方面）の入山者が増えている。
- 平成22年6月13日現在遭難件数が8件のうち三重県は1件で、他県の事故者の救助活動を行っている状態である。昨年は20回以上出動したがほとんど無償。
- 遭難の70%が40歳以上である。
- 冬には樹氷見物にロープウェーを利用して入山する人がいる。
- 2009年に三重県に山岳遭難防止対策協議会が設立されたが、予算付けがないことから、活動資金が無い状況。保険も適用されるか心配である。

現状を踏まえて今後どのように事故防止に活かしていくかについて町田副委員長を座長に協議を行った。

テーマ2は鹿児島岳連の伊達さんから霧島で2年連続で死亡事故が発生したが、実際の発見には岳連が寄与したが任意団体なので捜索本部には加われず手弁当で活動した。連携して早期発見につなげたいという報告であった。

- 平成20年10月11日に高千穂で起こった滑落死の事例（沢の源頭より40m転落）道迷いによる事故か？
  原因は、下れば何とかなるという思い込みか？　何が何でも下るという一心か？　道迷いに気がつき登り返さずショートカットしようとしたか？
- 平成21年10月31日に韓国岳で起こった小学生疲労凍死の事例
  原因は、子どもが先行し道迷い（整備された新道でなく古い旧道より滑落）父親が公務員のため、大事になってはいけないという思いから、初期捜索を依頼しなかった点。
- 任意団体で正式に出動依頼はなく、任意で捜索し発見。捜索本部に加われるようにするため岳連救助隊のＮＰＯ化を推進中。

現状を踏まえて今後どのように事故防止に活かしていくかについて西内委員長を座長に協議を行った。

テーマ3は東京都岳連の小池さんから講習会での事故報告があり、事故の原因、事故後の対応、事故を起こさないための講習会での注意点などが説明され、青山副委員長が座長でベストな事故対応やそのマニュアル化などについて協議されたが他の府県の講習会でも大小多くの事故が起きていることが分かり事故を起こさない講習会運営の普及を痛感した。

総会は28日に行われ岩切常任委員が全体進行を行った。西内遭難対策委員長と神奈川岳連の大曽根会長の挨拶で開会し、最初に町田副委員長から遭難対策常任委員会で実施したロープ強度試験報告の報告があった。指導委員会でも同様の試験を実施し、同様の傾向の結果がでていること、今後も実使用に即した強度試験を継続する。（10月末登山研で大阪府岳連と共催予定）

引き続き青山副委員長より第7回山岳事故調査報告があった。大きな傾向は変わらないが、若年層の事故率が増加に転じたので注視する必要がある。続いて同じく青山副委員長よりトムラウシシンポジウム報告があった。最後に研究協議について各班より発表があり、情報の共有化が図られた。昨年までは発言のない出席者もいたが班別で身近な事故事例についての討議を行ったため各都道府県の状況も把握でき有意義な研修会、総会となった。主管の神奈川岳連に感謝したい。

【総会出席者】尾形好雄（事務局長）、西内博、町田幸男、青山千彰、永井伸幸、渡部逸郎、瀬藤武、渡邊輝男、岩切貴乃、小池正器、廣川健太郎、下越田功、中丸忠男、近藤孝久、大沼正博、宮永幸男、石田英行、町田雅美（以上常任委員）阿曽清浩（山形）楡井利行（新潟）小暮文彦、清水祐千（群馬）須加邦彦（千葉）松代正範（石川）増田利行（福井）高橋政男（長野）廣瀬修二、佐藤和也（岐阜）前川朝夫（静岡）高橋優（愛知）佐藤信裕、小古真也、井上正隆（三重）竹村喜一郎（滋賀）一本松文夫（兵庫）前田善彦（奈良）香田隆史（鳥取）堀内輝章（広島）江本正彦（山口）植野慎治（岡山）武田豊明（愛媛）戸高和義（福岡）伊達栄（鹿児島）大曽根広、菊池稔、落合正治（神奈川）

（遭難対策委員長　西内　博）

平成 22 年度
全国山岳遭難対策協議会に参加して

平成22年度全国山岳遭難対策協議会が7月16日（金）に代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催され、例年通り、全国から警察、消防、山岳関係者等210余名が参加した。

主催者を代表して文部科学省の坂元生涯スポーツ課長の挨拶のあと、日程に添って進められた。

報告1は、「平成21年度中における山岳遭難の概況」が警察庁の佐藤地域課長補佐より報告された。平成21年度の発生件数は1,676件（前年対比＋45件）、遭難者数は2,085人（前年対比＋152人）、死者・行方不明者317人（前年対比＋36人）と何れも、昭和36年以降、過去最高を示し残念ながら年々増加している。

中高年者の発生状況は遭難者数で全体の76.8％、死者・不明者は89.6％と傾向通り高い比率で、様態別では、道迷い906人（43.5％）、滑落325人（15.6％）、転倒259人（12.4％）となっている。

振り返ってみると、平成10年の発生件数は1,077件、死者行方不明者は251名、だった。昨年度は遂に1,600件を越えてしまった。一向に減少しない遭難事故に手だてが無いのかと無力さを感じる。未組織登山者への啓発は勿論、加盟山岳団体会員もこの際、原点に立ち返り「山の危険」を知り、正しい登山技術を習得してほしい。

特に未組織登山者には積極的に登山教室等に参加することを進めて、安全登山への手順を充分に理解して山に入ってほしい。また、登山界としても何時でも、誰でも参加できる場を提供する努力を更に進め、皆が楽しい登山を実践出来るようにして行きたい。

報告2は、「松本広域消防局における山間地救助への取り組み」が松本広域消防局の救助隊が発表した。消防局や救助隊の概要説明、山間地救助の対策等がスライドで示され、ヘリによる救助事例がビデオで紹介された。

午後より講義に入り、昨年の開催時に発生したトムラウシ山遭難事故を踏まえて、最近注目されている気象遭難と低体温症が取り上げられた。また参考資料としてトムラウシ山遭難事故調査報告書が配布された。

講義1は、「気象遭難を防ぐために」と題し、気象予報士の猪熊隆之氏が行った。

昨今の気象変動の要因、異常気象のメカニズム、気象遭難との関係や事例による解説はかりやすく参考になった。

事例の2006年の白馬岳、2009年の鳴沢岳、昨年のトムラウシ山は気象条件の共通点があり、若干専門的であるが各種の気象情報を駆使すれば何れも「荒天を予想できた」は大変興味があった。最近サービスが開始された山の天気予報を積極的に利用すべきと感じた。

講義2は、トムラウシ山遭難事故調査委員を務められた金田正樹医師が「夏の低体温症」について話された。低体温症の定義と分類から山岳遭難は体温低下が原因の偶発性低体温症であるとの事、体温を奪う様々な現象と臓器への影響や体温と症状等の発生のメカニズムについても細かい説明があった。その上でトムラウシ山事故調査内容にも触れ、大勢が死に至った低体温症発症の状況や原因、対策を指摘された。

近年、低体温症に対する注意が機会ある毎に喚起されていながら、全く対応出来なかった事は大変残念である。引率者も参加者も気象遭難の事例や低体温症に対して深刻に受け止めていれば避けられた遭難で、残念としか言いようがない。明らかな引率者の判断ミス、参加者の勉強不足とおまかせ体質は、日本でのツアー登山の未熟さを感じた。

終わりに、毎年感じる事だがこの協議会に山岳界からの参加者が少ない。非常事態の今、山岳団体は勿論、山小屋関係者、登山用品店、登山界、業界を上げて遭難事故防止に取り組まなければ遭難事故の減少は無く、折角の協議会開催意義が薄れてしまう。来年度に期待したい。　（内藤順造　記）

「道迷い遭難対策」
登山における GPS 活用の薦め

輸入品であるために「高嶺の花」であった、登山用GPSにも低価格で登山に活用できる製品が登場し始めたが、最近では携帯電話によるGPSも格段の進歩を遂げている。7月の全国遭対会議においても、各種GPS技術が、遭対活動に活用されている報告があり、あらためて、最近のGPS端末やサービスについて述べてみることにする。

⑴携帯電話におけるGPS

最近の携帯電話には、GPSを搭載している機種が増えている。auでは全ての機種、ドコモ、ソフトバンクでは上位機種など、総務省の指導により、GPS搭載が義務付けられ、既に、志賀高原のボーダーレスキューや山梨県や山形県などの救対活動にその実用性が示されてきた。

【緊急呼】

これは米国における「911アクト（Emergency 911 Act）」に呼応する形で、わが国でも2007年以降、緊急通報の通報者の位置特定を行う仕組みを携帯電話に義務付けるもので、米国に習いわが国でも総務省が率先して携帯キャリアー会社に義務付けているものである。

大まかには、110番通報、119番通報発信者の位置をGPSによって特定し、携帯電話から自動的に警察もしくは消防へ通知できるシステムである。これはサイマルテーニアス通信といい、通報中の「会話」と同時にGPS信号を自動で通知するもので、対応している携帯電話が自動で稼動する仕組みである。

これらの送信されたGPS位置情報は本来、警察本部または消防本部の表示パネル上に表示できるものであるのだが、実際にはその表示システム導入への「予算取り」の都合で、いまだ導入している県警や消防局は極めて少数に止まっている。しかし既に導入している松本消防局などはその有用性については評価している。

この緊急呼システムは、但し「通報」の際には「電波圏内で電話が通じる」ことを前提とする意味で、全ての山岳遭難にオールマイティに役立つわけではない。また、携帯電話側のGPS測位も、「電波圏外、電波圏内」での作動が明確になっていないようである。

【安心ナビ】

これは主に「学童の居場所確認」」用に考案されたもので、特定の相手同士の了解の上で、相手の携帯電話の位置情報を携帯もしくはパソコン上で検索できる仕組みである。

これを「登山」に適用すると、家族間における「居場所確認」が可能であり、登山中に親近者の安否確認にも応用できる。リアルタイムで可能なのは、相手方の携帯電話の「発信信号」が受信できる場合に限るが、仮に電波圏外に出た場合にも、直近の「記録」から「足取り」を捜索するのが容易となる。登山者のいる家族間でのこの仕組みの利用を促進したいものである。

【スタンドアロン測位】

「山では使えない」と思われがちな携帯電話であるが、最近の携帯電話のGPSは、携帯電波の届かない「圏外」でも位置測位ができる機種が増えている。ａｕでは2007年以降、ドコモでも近々の携帯電話端末は圏外でも測位できる「単独測位（スタンドアロンGPS）」に対応している端末がある。これは少なくとも電波のない場所での位置測位（緯度、経度）の測位が可能で、auなどでは主要山岳部の地図を使えば地図上に現在地が表示できる優れものである。

一般に、下界で活用されている「GPSナビ」は、この「単独測位」ではなく、携帯基地局を補完的に使う「アシステッドGPS」であり、下界で利用できるほとんどの地図スキームは、携帯電波の届かない山間部の「圏外」では、使い物にならない。一部、「山でも使える」と騒がれた新型携帯のGPS機能も、皆「電波圏内」の現象を勘違いしていたことが判明している。

⑵単独GPS関連機器

【GPSロガー　初期型GPS】

単に「位置情報を取得する」「現在地の緯度経度を計測する」のであるならば、上記の「スタンドアロン携帯GPS」でも可能であるが、その位置情報を「行動記録」としての「ログ記録」を行うものが「ロガー」である。現在は専用機もあるが、もともと「行動記録」を残すための初期の単独GPS機器は、「緯度,経度」測位表示しかできなく、その地点情報を、地形図に正確にプロットするためには「度、分、秒」を示す特別のスケールと地図が必要であった。

現時点でも低廉のためにこの初期型のGPS機器を登山用に携帯するケースが多いが、昨冬の安達太良山遭難のように、GPSを保有していても「現在地ロスト」を生じるケースが後を絶たない。吹雪やガスの中で落ちついて地図を広げて、現在地確認できないケースが多く、「行動記録」としての機能は十分であるが、この種の初期型GPSは「道迷い遭難」に対しては限定的効果しか期待できないであろう。

【登山用GPSの変遷位置測位と地図表示とログ記録】

「緯度・経度」しか表示できない初期型GPSから、次第に「地図の表示できるGPS」へと急速に単独GPSの機能は進化してきた。が、その初期においては、登山地図そのものに「登山道」が表記されていず、「地形図相当地図」に、あらかじめ「登山道」を別途「カシミール」で作成されたものを、端末に移設する手間が必要であった。それを怠ると、地図上に現在地は示されても、それが「登山道」との位置関係が判別できず、位置確認は片手落ちのままであった。ここに「登山道」の記載された「登山地図」の表示できる単独GPSが求められる所以であった。

このような「地図表示のできる登山用GPS」は、米国からの輸入品であり、日本語版と英語版との価格差が大きく、「高嶺の花」状態が続いていたが、昨今、同様の機能を有する登山用GPSとして、低価格の端末や並行輸入品などが登場してきており、従来以上に広範な登山者達が利用できる環境にようやく近づきつつある。

これらの登山用GPSには、位置確認と同時に「行動記録」も残すことができ、且つ、最近のデジタルカメラによる撮影ポイントに位置情報を付加し、地図上の正確なポイントに撮影した写真を貼り付けることができる等、次第にGPS位置情報は、単なる「遭難対策」以上への活用性の広がりを見せている。

こうした意味で「道迷い遭難対策」を一義的課題にした上での、上記各種GPSの登山への活用を触発し、促進したいものである。

（株式会社ビジネスリンク　代表　榛野正直）

第21回 Mountain World

チマ・オヴェスト北壁の新旧伝説

池田常道

ドロミテのチマ・オヴェストといえば、思い出すのは、さきごろ100歳で天寿を全うしたリカルド・カシンのことである。第2次大戦前、偉大な先駆者エミリオ・コミチのあとを受けてイタリアのエースとなるカシンは、1935年、そのコミチさえ撃退していたチマ・オヴェスト（2973m）の北壁を、ヴィットリオ・ラッティと共に初登攀する。中間部に立ちはだかる有名な大ハングの上で大胆なトラバースを敢行、ヘッドウォールへとつなげて完登したのだった。２年後にはピッツォ・バディレ北東壁、その翌年にはグランド・ジョラス北壁のウォーカー側稜……岩ばかりのドロミテだけでなく、氷雪をミックスしたアルパイン・クライミングでも非凡な才能を発揮したカシンの原点がチマ・オヴェストにあった。

しかし、カシンがアブミも使わずにトラバースしたラインの下にある大ハングは、戦後もだいぶ経ってから（1968年）、西ドイツ（当時）のゲルハルト・バウアー、エーリヒ・ルドルフ、ヴァルター・ルドルフが登るまで未踏であり続けた。この登攀は、ピトンとボルトを最大限に駆使して（A3、ボルトの間隔は最短で1m）行なわれた登攀だった。

＊

それから31年後の2000年冬のこと、カシンの初登からじつに64年のち、現代ドイツの第一人者アレクサンダー・フーバーがこのハングを直登するルートを拓いて「ベッラヴィスタ」（7b+A4）とした。エイドまじりで拓いたこのラインをフーバーは2001年夏にフリークライムしてみせ、55mの核心ピッチに8c（5.14b）のグレードを与えた。ドロミテ最難どころか、ビッグウォールのフリーとしては世界最難ルートの誕生だった。

フーバーはこのときボルトを打たず、より大胆な挑戦の余地を将来に残したつもりだったが、その希望は裏切られた。2007年に彼が再登してみると40本もの支点が追加され、おまけにいくつかのホールドが加工されてグレードが8bか8b+まで落ちていたのである。うわさによれば、これは2005年に試みて登れなかったパーティの仕業だったという。

この惨状にショックを受けたフーバーは、大ハングを攻略する新たな挑戦を思いたった。それは、ベッラヴィスタを拓く前、最初に思い描いた1968年ルートのフリー化だった。当時はボルトの追加が不可避だと思ってべつのラインでベッラヴィスタを完成したのだったが、こうなってはオリジナルプランにもどって、真に困難なルートを拓くしかない。その年のうちに挑戦は開始された。ボルトが不可避だとしても最低限にとどめ、60m8b+のピッチに7本打つだけにした。その上はルーフを越える20mのピッチは8cで切り抜け、ルート名を「パンアロマ」としたのだった。

＊

いささか旧聞に属する話をなぜいま改めて書いているかというと、この夏、パンアロマがたて続けに再登されたからだ。

まず、イタリアのハンスイェルク・アウアー。２週間の休みを置いて合計３日間トライしたアウアーは６月30日、ついに第２登に成功した。次に成功したのは、ドイツのババリアから来たヘルムート・コッターだった。彼はこれ以前、昨年からベッラヴィスタを試みており、ことしに入って成功した勢いでパンアロマの第3登を果たした。そして第4登はスペインの兄弟、エネコとイケル・ポウの手に落ちた。７月14日に登りはじめた兄弟は大ハングが濡れていたため8b+のピッチで45分を費やし、次の核心20m（8c）では弟のイケルが４回も墜落、５回目にようやく成功するなどで時間を食われ、カシン・ルートに合流した時点でまだ12ピッチ300mを残していた。しかし、すでに午後６時15分。１日で登るつもりでなんの防寒具も用意していなかったが、ここでビバークしてから翌朝頂上に抜けた。ちなみに、初登したフーバーも、同行したマックス・ライヒェル、フランツ・ヒンターブラントナーと共にビバークを余儀なくされている。

パンアロマの大ハングに挑むイケル・ポウ。７月14日、第３登を果たしたときのショット。

BMC International Sea Cliff Climbing Meet 2010（後編）

期　　間　2010年５月９日～ 16日
場　　所　イギリス コーンウォール地方
主　　催　ＢＭＣ（British Mountaineering Council）
参加形態　日本山岳協会からの派遣
参 加 者　中嶋　徹、兼原　慶太

【報　告】　（前号496号よりつづく）

２日目。朝から雲行きが怪しいがCribba Headという岩場へ行く。駐車場から幾分遠いアプローチに加え、踏み後もはっきりせず人気のなさが伺える。果たして岩を見上げるとそれはそれはひどい岩場だった。12mほどの大きなボルダーで、岩全体が毛足の長いコケに覆われている。何年も登られていないのではないかと思えるような岩場である。おまけに着いた途端に雨が降り出した。はるばる日本からやって来た人間を連れてくるのがここか？　基部で雨宿りしつつも他の岩場に連れて行ってほしいと思っていると、ホストのMarkが一言、「良い岩場だろ」。しばらくして薄日が差すようになり、さあ移動かと思いきや、ホスト２人は我々のためにトップロープを張ると言い、簡単なルートを登り始めてしまった。コケは水を含みビショビショである。仕方なく我々も濡れの少ないE3のコーナークラックでアップする。小川山レイバックをフィンガークラックにしたようなルート、と言えば聞こえは良いが、これは見た目以上に悪かった。さらにトップロープでE6と思しきラインを登る。こちらはそれ程悪くなかったのですぐにリードで登る。ノープロの下部での墜落は許されないが、上部のクラックはそれほど難しくないのでたぶんE4くらいだろう。だんだん岩も乾きはじめ、徹がそのすぐ左にある毛だらけのカンテラインをトップロープで探る。バランスがかなり悪そうだ。おまけにスタンスが欠けたりして、登られているのかいないのか判然としない。しかし、もう一度リハーサルしたらすぐにフリーソロで登るという。極小ホールドでバランスが要求されるカンテライン。しかも岩が安定していないにもかかわらず、それをすぐにフリーソロとは。かくしてしばし

GPS登山地図

G-navi「GN-01」
パソコン用デジタルマップ標準装備

「道迷い遭難」には登山用GPS

登山地図4,342面を収録

http://svgnavi.jp/

携帯電話auでＧＰＳ登山ガイド

山と写真ガイド
豊富な登山と写真記事を掲載

圏外で使えるケータイGPS

au携帯電話より登山
全119エリア等高線地図

http://yamanavi.jp/

BLC BUSINESS LINK CORPORATION

「G-navi」、「山と写真ガイド」に関する情報は各ホームページへ
お問合せ　株式会社 ビジネスリンク　TEL:03-3475-0454

の精神集中の後、終始安定感のあるムーブをこなした徹は、１分後には岩の上でガッツポーズを決めていた。グレードはおそらくE7。このときは本当に驚いた。はっきり言って人生がかかっているトライである。それをこんな短時間で、しかも思い入れがあるとは言えない毛だらけのヤバイルートに取り付く決断をするなんて。ためしにトップロープで私も触ってみた。ムーブ自体は5.12ｂくらいで、もう１回やれば落ちることはないだろう。しかし、カンテラインのこのルートはバランスが悪いうえ、１ヶ所もプロテクションが取れないのだ。落ちれば岩盤に叩きつけられ、遥か下の海まで転がっていく事だろう。仮に自分だったら、１日中もしくはもう１日リハーサルして、そのあと１週間くらい考えて、やっぱりやらない決断をするだろう。

その後、私はこの岩場で一番目立つE4のクラック“Pass the Pigs”を登った。5.11後半くらいで意外に難しかったが、なんだか「悪い」とか「怖い」という言葉を安易に発することができない気分になってしまっていた。夕暮れ前、期間中ホストがさんざん登って欲しいと言っていたコーンウォール最難課題“Qestion Mark”(E9) を徹がトップロープで探る。これを登らせたいがために、こんなひどい岩場に連れてこられたのだ。被ったカンテラインでプロテクションは中間部のカチにスカイフックが１ヶ所のみ。ムーブもかなり悪そうに見える。疲れていたが興味本意で私も触ってみる。ムーブは確かに悪い。初登者は5.14と言ったようだが、たぶん5.13の中間くらいだろう。しかし取付きは岩盤。中間部のスカイフックなどあってないようなもの。それが足元をすぎてからダイナミックなムーブが要求される核心部へ入っていく。２回目のトップロープで徹はノーテンになった。しかし、これは本当にヤバイ。ビレーするにも刺激が強すぎる。とりあえずトライするしないは別にして、明日以降は違うエリアにも行きたいと希望を伝えることにしよう。しかし慣れとは怖いもので、コケコケの岩場ではあったがしっかり１日楽しんでしまった。

３日目。今朝はゲストとホストがシャッフルされ、新しいパートナーどうしが挨拶する場面が随所で見られた。しかし我々は徹の成果を期待するメディア系ホストの継続希望により変更なし。そんなホストの「お仕事感」を敏感に感じ取っている私に気を使ってなのか、どんなクライミングがしたいかと、徹に相談しようとする私を制して、私だけの意見を求めてきた。「コケコケじゃない岩場で登りたい」とは言わず、単に「いろんなルートをたくさん登りたい」と言ってみた。それで連れて行ってくれたのがSennenという岩場。昨日とは打って変わって着くなり我々２人とも大喜び。コーンウォールでは人気エリアのひとつのようだ。高さ20 ～ 30m、幅400ｍほど壁が続いており、取付も安定していてすばらしい。ひと通りルートを教えてもらい、アップにE2までの簡単なルートを徹とリード＆フォローで登る。そして私はE6の“Let the River Live”(E6 6b)を触ってみることにした。被ったカンテ状のルートで、下部のボルダーチックな核心が悪いが、プロテクションセットのコツも分かりムーブは繋がった。リードは体がフレッシュな次の機会にとっておくことにする。徹は２回のリハーサルの後にあっさりヘッドポイント。続いて私は“Demolition”(E6 6a)も探っておくことにした。こちらは一回目にすんなりノーテンで登れた。しかし問題はランナウト。核心で落ちればグランドフォールは免れないだろう。しかし徹にはフラッシュ狙いでリードしてみたら？と勧めてみる。ムーブ自体はそれほど難しくないし、私の登りでイメージはできているだろうから。一瞬頭をかしげて考え込み、すぐにトップロープを引き抜いて登りだした。何の迷いもなく核心部をこなし、あっという間に壁の上へ抜けていってしまった。今日も恐れいりました。

４日目。体の疲労と後半の日程を考え、今日はレストにしてAlexにSt Ivesという港町へ連れて行ってもらう。きれいな港と南仏を思わせる美しい町並みが印象的だった。晩はFish &Chipsパーティー。宿舎ではなく近くの村のお店で集合。我々はＢＭＣの担当者たちと一緒に向かったのだが、お店を前にしながらも背中を向け、まずはBarへ入る。何杯かビールを飲み、顔が赤くなった頃にお店へ向かう。お皿いっぱい溢れんばかりに盛られた英国伝統料理？を食らう。美味いとかまずいとかいう類の物ではないので、味についてはなんとも言えないが、英国紳士淑女がたどり着く体型を考えれば、この伝統料理、完食すべきではなかったのかもしれない。

５日目。朝から雨で皆レスト日の雰囲気。リビングでＤＶＤの上映会。「Onsite」というＤＶＤを観る。イギリスでは「Hard Grid」以降ヘッドポイント（トップロープで試登した後にリードすること）がトラッドの流儀となっているようだが、最近では更なる冒険を求めてか、オンサイトでボールドなルートにトライする人が増えてきているのだとか。かなりヤバイ。さらに上映会は続くが、ホストをせかして岩場（Sennen）へ連れて行ってもらう。昼過ぎに雨は上がったが、岩場はビショ濡れだった。被害の少ない

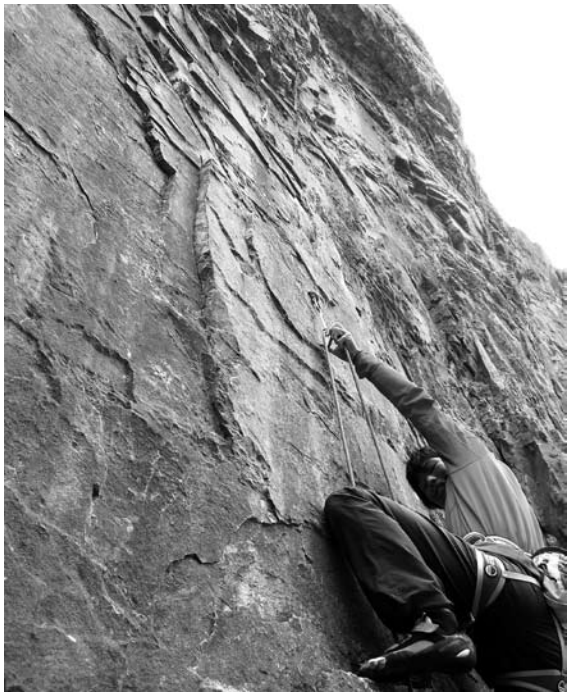
“Demolition” (E6 6a)でアップ代わりにムーブを確認し、その後すぐにヘッドポイントした。絶対に落ちてはいけないクライミングの集中力が心地良い。雨は上がったものの波が高く、潮が壁に吹き付けられるため登れるルートは限られている。かろうじて登れそうなE4とE3のルートを登った。このうちホストのMarkがしきりに勧めるE3の“Gillian”はグレードこそ5.11前半くらいだが、出だしから10mほど利きの悪いナッツ１個だけで登らなくてはならず、内容も良くすばらしいルートだった。陽も暮れかかり、もう帰ろうとアプローチを戻っていると、途中にある濡れていないカンテライン “Hell Hath No Fear ” (E7 6C)を徹が立ち止まってながめている。Alexに確認すると、日暮れまであと30分ほど時間があるという。それを聞くと急いで終了点をつくり、すぐにトップロープで１回リハーサル。降りてきて「すぐやります」と言う。「何を？」とは聞かなかったが、代わりに「ロープは？」の問いに「使いません」と。この課題、取付きが壁と言うより崖の途中にあり、一手目で落ちても崖下に転落して即サヨナラ、というロケーション。最上部では横クラックにプロテクションも取れる。しかしフリーソロ。結果的にはアッサリ登ってしまった。完全に凡人には理解できない域である。

６日目。昨日、徹がリハーサルしたルートにビレー用として残したナッツが、午後の満潮で波に洗われ回収できなくなってしまった。これが良い口実となり今日もSennenへ行く。この日は昨日以上に波が高い。適当にボルダーでアップをしたが私の目的のE6は完全に濡れてしまっている。仕方がないので濡れていない “Baptism of Fire” (E6 6b) という昨日徹がフリーソロしたカンテの右側にあるルートを探ることにする。ルートは短く、出だしと最後にプロテクションが取れるが、中間部のブランクセクションで落ちることは許されない。しかしムーブ自体、極端に悪いわけではなかったのですぐにリードし、無事ヘッドポイントした。徹は昨日リハーサルしたルートをもう一度おさらい。しばし休憩の後、リードトライ。約15mの垂壁に薄いクラックが縦横に走っているがプロテクションの取れるところはわずか３ヶ所。初登時は４本のピトンが打たれていたが、現在はその全てが抜かれている。また１ヵ所にドリルの穴が残っており、そこに最新のシングルワイヤーのナッツがしっかり決まると言う。トライ前、その穴にナッツを入れるかどうか、迷いを相談に来た。私としては無責任なことは言えないが、あくまで一般論としつつ、「本来そこにあったものではない人為的なものからプロテクションを得る行為である」こと。そして「そもそもクライミングは自己満足の行為なのだから、完登した後に自分で納得できるかどうかが大切である」。そんなことを伝えた。しかし、取付で「シングルワイヤーは使わずに登ります」と言われた時、これはもう他人事ではなくなってしまったと少しばかり後悔の念にさいなまれた。かくしてヘルメットのあご紐をしっかり締めて登り始めた徹は、まず台座に乗り上がり最初のプロテクションとして横クラックからナッツを２つ固めて取った。そこから少し登り、さらに１つ上の横クラックに細めのブラスナッツを決める。安定した登りで進むが、ブラスナッツが足元を過ぎたあたりで足を振ったときにロープも一緒に振られ、そのために揺れたナッツがいとも簡単に外れ落ちてしまった。仮にその地点から落ちればグランドフォール間違いなし。しかももはやクライムダウンは不可能。さらに核心はそこから始まる。見るからに絶対絶命のピンチ。こんなとき、ビレーヤーは無力だ。仮に落ちてもロープ操作ではグランドフォールを防ぎようがないし、応援したくても緊張させてはいけないと思い、声もかけられない。ただ、落ちて岩盤にたたきつけられた徹の体を如何に処置し、ご家族になんと報告しようかと考えながら、止まるはずのないロープを握っていることしかできないのだ。そんなビレーヤーの思いを知ってか知らずか、ロープはさらに伸びていく。何手出したのかは分からないが、最後はデッドポイント気味に左手をクラックに伸ばした。果たしてそれがガバなのかどうか、見た目では判断できなかったが、軽い雄叫びが聞こえたのでたぶん核心は越えたのだろう。ようやくナッツを１つ決めるともうしばらく登り、最後のマントルを返して私の視界から姿を消した。“29Palms”（E8 6C）第２登。こんなビレーは初めてだった。

興奮冷めやらぬうちに、先ほどスロベニア人がトライを諦めた右の “Tears of a Clown” (E7 6c) をオンサイトトライするという。確かにスロベニア人の登りを見ないように遠くの方で海を眺めていた。最初のプロテクションがいきなりスカイフックなのには驚いたが、これもまた安定した登りで無事オンサイト。一方、夕方になっても私の目的のE6は乾く気配がなく、今回はあきらめることにしてE2の人気ルートなどを登る。夕暮れ時になり、徹が最後にE6のオンサイトトライをすると言い出した。こちらは先ほどの２本よりプロテクションは良いが明らかなブランクセクションがある。さすがに疲れているのか、徹はしばし行きつ戻りつした後、クライム

ダウンしてロープにぶら下がる。徹がリードでロープにテンションを掛けたのは今ミーティング期間中初めてではないだろうか。なるほど、腿に食い込むハーネスの感覚が新鮮でビレーヤーとしては何だかうれしい。徹がぶら下がるのを見て、遅まきながらやる気になったわけではないが、私はこの “Pinch the Egyptian” (E6 6c) をフラッシングして、コーンウォールでのクライミングを締めくくった。今晩は最後のパーティーだったのだが、今日も車に戻ったのが21:00。会場に着いた頃にはまたも食べ物がなくなっており、早々に宿舎に戻り、台所に残っていた残飯を集めて適当に夕食を済ませるしかなかった。

７日目。今回のミーティングのおまけ、ボルトルートのエリアCheddar Gorgeへ移動する日。朝から本降りの雨。移動するには頃合いの天気だ。ゲストの３分の１ほどは参加せず、最寄のPenzance駅からそれぞれ帰国していった。我々はAlexの車で途中のパーキングやカフェに寄りながら、たっぷり４時間以上かけてようやくCheddarに到着。着いて初めて気が付いたのだが、ここはチェダーチーズで有名なチェダーだった。２時間前に着いたという他の連中は、何をするともなくダラダラしていた。雨は既に止んでいるし、壁はそれほど濡れているとも思えないのだが。我々はコーヒーとケーキでの歓迎をしっかり受けてから岩場へ向かう。狭く短い渓谷沿いに10mから100mの高さの石灰岩壁が並んでいる。他の国々の石灰岩壁と比べると、お世辞にも綺麗とは言えない。トラッドとボルトルートが混在してはいるが、基本的にはボルトルートの岩場として認識されているようだ。しかし非常に有名な観光地ということもあり、普段は登攀禁止になっているのだが、この日はフェスティバルということでクライミング解禁日。ロープを忘れてしまった我々は、まずケイブの下の汚い壁でボルダーをして遊び、レスト日なしで登り続けているベルギー人が、もう疲れたと言ってロープを貸してくれてからは、適当にボルトルートを登る。はじめは岩質の違いやボルトの多さに多少のとまどいを感じはしたが、それもすぐに慣れ、それなりに楽しめてしまうからなんとも複雑な気分だ。トラッドとは全く違う感覚だが、岩に触ろうともしないゲストたちがいる一方、我々のように次から次へと登りこみ、楽しんでいるゲストもいる。ただ、我々はいろんなクライミングの楽しみ方を知っているだけであり、仮に楽しさに質量があるとするならば、その比重は明らかに「冒険」に傾くことになるだろう。夕食のパーティーで、この日



ホストがほとんどいなくなっていることに気がついた。我々のホストAlexも岩場で我々を降ろしたらそのままシェフィールドに帰ってしまった。確かに昨日まで、もう一日Cornwallで登りたければDave（Turnbull、BMCのCEO）に一言いえば大丈夫だ、としきりに言っていた。「俺はあそこでは登りたくない」とも。ミーティングの最終日にあえてこの手の岩場に連れてくる意味。なんとなく分からないでもないが、やはりトラッドクライミングの後味を大事にしたい気がした。

＊おわりに

取付く前の緊張感。スポーツルートで感じるような、登れるかどうかという緊張感ではなく、絶対に落ちてはいけないという緊張感。これはまさにアルパインで感じるそれと同質だ。あるところから先では引き返すことはままならず、登りきるしか手段はない。10mの岩であっても、1000mの壁での登攀と同質の感覚が体験できる。

登るという行為を等しく冒険ととらえ、冒険者に対する敬意と評価を過去から現在にかけて、そして未来に向かっても途絶えることなく保ち続けるだろう基盤が、この国にはある。

今回のミーティングでは、60代、70代のホストと10代、20代のゲストやローカルが同じ課題、ムーブについて意見を交換しあったり、新ルートの可能性を互いに相談し合う光景をたびたび目にした。

現在は未来のためになくてはならないと思う。安易に可能性の芽を摘むような穴を開けるべきではない。すべて分かっているつもりではあったが、改めて体感することで再認識させてもらった思いである。

Climbing Meet：毎年　夏・冬交互に開催（2011は冬、2012は夏でWalesに決定）

海外登山隊クロニクル　第2回ザ植村直己デイ講演会を開催

７月24日東京の都心にある学術総合センター一橋記念講堂で、海外登山隊クロニクル第２回ザ植村直己デイ講演会が開かれた。酷暑にもかかわらず会場一杯の500余名の聴衆が集まった。年齢層はやはり中高年が多いが、20代の若者の顔も見えたのが良かった。

田中会長、大塚日本山岳会元会長の挨拶に続き、植村氏の足跡をたどったビデオが上映され、往事の植村氏の姿がスクリーンに映され氏の記憶を新たにし、講演にうつった。

植村氏と共にエベレストの山頂に立った松浦輝夫氏は、出会いから登頂隊決定時の生々しい状況と冷静に行動する植村氏の思い出を、元文藝春秋社カメラマン安藤幹久氏は同行した北極点探検時のエピソード、明治大学山岳部で植村氏と同期の廣江研氏が昔年の大学山岳部の厳しい訓練の様子などを通し、三人三様に植村氏の思いやりのある人柄や、粘り強さなど氏の人間像を語った。

熱気に包まれる満員の講演講演会場

ビデオの後半部の上映に続き、田部井淳子氏が植村氏との出会いから、現在に至る自らの未知へと駆り立てる思いを熱く語った。植村氏と共に70年代の冒険の時代を駆け抜け今も未知へ想いを馳せる言葉は、植村氏が存命なら同じように未知へと挑戦していたであろうと思わせた。

その植村氏の行動と精神を若い世代がどう受け止めているか、後半は、元山と渓谷誌編集長の神長幹雄氏の司会で天野和明、栗城史多、三浦豪太が各々の「植村体験」そして現在の冒険に挑む想いを語った。70年代とIT時代の現在の記録の残し方の違いが興味深かった。ビデオ出演という形でコメントを寄せた山野井泰史氏の「どきどきする心を大切にしたい」との発言にパネラー各氏が賛同した。

植村氏の冒険とエベレスト遠征だけにとどまらず、現在につながる冒険と未知への好奇心を刺激する登山スピリットが聴衆に伝わったのではないだろうか。若い世代にこれをどう繋ぐかが今後の課題であろう。　（国際常任委員　笹生　博夫）

寄贈図書

●寄　贈　本●

㈳日本山岳会 SANGKU　VOL.105
盛岡山岳会雪やけ　４号
西本武志十五年戦争下の登山　２冊

●雑　　誌●

東京新聞出版局岳人　８月号
山と渓谷社　山と渓谷　８月号
中国登山協会山野　７月号

●会　　報●

兵庫県山岳連盟
㈶健康体力づくり事業財団
福岡山の会
国立登山研修所
㈶日本万歩クラブ
横浜山岳会
日本スポーツ振興センター
㈶日本ゲートボール連合
㈶全日本ボウリング協会
㈶富山コンベンションセンター
㈳日本武術太極拳連盟
高校生新聞社
国立公園協会
㈳大韓山岳連盟
㈷日本オリンピアンズ協会
日本勤労者山岳連盟
もんたにゅ会
東京野歩路会
㈳日本山岳会
㈶全国高等学校体育連盟
㈳日本山岳会　自然保護委員会
㈶前橋観光コンベンション協会
FEDME
㈶自然公園財団
HAT-J
㈳国土緑化推進機構
㈶日本卓球協会
Corean　Alpine　Club
日本山岳写真協会
愛知県山岳連盟
㈳日本パワーリフテイング協会
㈶日本卓球協会
㈶尾瀬保護財団
信州大学山岳科学総合研究所

50th Anniversary JMA

平成22年度７月（22年７月）
常務理事会議事録

日　時　７月8日㈭17：30～
場　所　岸記念体育会館103会議室
出席者　田中会長、粟飯原副会長、神﨑副会長、本木副会長、西内、仙石、高山、堀井、尾形、北山、相良、谷口、寺内、永井、、長谷川各常務理事
委　任　内藤副会長、佐藤、青木常務理事（18名中15名出席）

1.専門委員会動静

６月常務理事会以降
（６月10日～７月７日）
［報　告］

⑴指導・競技合同委員会
６月14日㈪　出席者７名
ア　スポーツクライミング上級養成講習会（山梨）の準備打合わせ
・タイムスケジュールと講師の分担
イ　スポーツクライミング上級養成講習会（福井、宮城）について
・開催要項と講師の確認

⑵自然保護委員会
６月15日㈫　出席者13名
ア　委員総会の取組みについて（９/11～12、新潟）
イ　第1回自然保護委員研修山行について（６/19～20、尾瀬、帝釈山、駒ケ岳）
ウ　自然保護指導員の承認（更新、新規）
エ　50周年記念事業の取組みについて
50周年記念誌「自然保護」の記録
オ　トレイルランの対処について
ＪＭＡとしての山岳自然保護活動の考え方を提起
最近の事例を協議。対策と指導の強化を確認
カ　野生鳥獣目撃レポートについて
自然環境連絡会でのリーフレット配布
キ　自然保護委員会の構成について

⑶競技委員会
６月17日㈭　出席者17名
ア　６月常務理事会報告
イ　千葉国体リハーサル大会兼リード・ジャパンカップの開催報告について
ウ　JOCジュニアオリンピックカップの進捗状況について
エ　第１回ブラインド・クライミング世界大会の進捗状況について
オ　リード・ワールドカップ印西大会2011の進捗状況について
カ　後催県の準備状況について
キ　審判員、ルートセッターの登録更新について
ク　第１回全国高校生クライミング大会の準備について
ケ　『国体山岳競技の歴史』の上梓について
コ　68回国体（東京大会）からの監督の資格について

⑷広報委員会
６月23日㈬　出席者６名
ア　登山月報７月号の編集について
イ　ＨＰについて
空きのサーバーを使って、委員会の専用サイトを作る。
委員会向けの雛型を作成中。
指導、自然保護、広報は作成中。
このサイトは、閲覧者に制限を付ける予定。
ウ　日山協のリーフレットについて

⑸普及委員会
６月23日㈬　出席者６名
ア　平成22年度中高年安全登山指導者講習会連絡会議（5/29）の報告
イ　第49回全日本登山体育大会について
環境省の名義後援認可
開催実施要項の発送
各コースへの地元解説者の配置
ウ　みんな集まれ！ジュニア登山教室の件
申込み状況
準備資料作成等
引率役員顔合わせ（8/3）
エ　中高年安全登山指導者講習会について
共催事業分担金交付の申請
平成23年度開催地の件：秋田、兵庫

⑹医科学委員会
６月26日㈯　出席者３名
ア　通常総会（5/16）の報告
イ　ＪＭＡ50周年記念リーフレットの校正

【50周年記念募金協力者ご芳名】
（８月５日現在）
14口：福島県山岳連盟（梓山の会、郡山山岳会、高体連登山部、福島キャノン山の会、吾妻山の会、石川町役場山岳部、福島市役所山岳部、福島高校岳友会、東山岳会、西郷山岳会、あだたら山の会、石城山岳会、会津山岳会、郡山市役所山岳部、山峯会、ＦＣＡ）、10口：静岡県山岳連盟、６口：岩手県山岳協会、３口：渡部逸郎、２口：安藤武典、二階堂章信、斎田晏生、椎名正道、白石崇、有田信彦、新田優、野本邦彦、名古屋白熊山岳会、鳥取県山岳協会、月岡武久、柳原政一、松代正範、桶川山の会、足達敏則、東京都高体連登山部、田場典淳、岡本忠良、高橋時夫、１口：山口善弘、大西寛
総額：408口・204万円

ウ　UIAA MedCom meeting出 席の件
エ　UIAA MedCom Official Standards の新しいテーマとして引き受けている
「Non Caucasian and High Altitude」について松林委員から中間発表あり
オ　日山協から支援を受けている医科学的諸事業の報告について
国際認定山岳医研修会、日本登山医学会認定山岳医研修会（上小牧）
ＮＰＯ富士山測候所を活用する会（浅野）
ＪＳＭＭ登山者検診ネットワーク（堀井）
カ　その他
UIAA MedCom Official Standards　Vol.17「登山およびスポーツクライミングにおける外傷の分類について」の翻訳を梶谷委員が取り組み中との報告あり

⑺遭難対策委員会
６月27日㈰　出席者17名
ア　常任委員無雪期レスキュー研修会について
7/31～8/1　国立登山研修所参加12名予定
イ　委員総会反省
分科会方式も意見がたくさんでて良かった
内容的には非常に充実していたが、どう実行していくかが最大の課題

⑻選手強化委員会

50th Anniversary
JMA
守ります。美しい日本の山。

あなたの保険は、
安心して登山ができる保険ですか。

自分だけは安全、と思いがちですが、
年間遭難者数は約2,000人です。

■平成20年 山岳遭難の概況
（警察庁生活安全局地域課 平成21年7月3日）

発生件数 1,631件
遭難者数 1,933人
死者・行方不明者 281人

詳しくは ➡ www.jma-sangaku.org

お問い合わせは

日本山岳協会 山岳共済会
事務委託：日本山岳協会山岳共済事務センター
月～金　10：00 ～ 17：00（土・日・祝日除く）

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707
TEL：03-5958-3396　FAX：03-5958-3397
E-mail：sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

6月28日㈪　出席者４名
ア　派遣選手・スタッフについて
代表の資格について
ボルダー及びリードの代表は、それぞれの種目の大会にしか参加できない。
世界ユース選手権エジンバラ大会代表追加
第24回リード・ジャパンカップ千葉大会の結果から以下の2名を追加
男子：樋口将裕　女子：飯田あずみ
残り9名はＪＯＣジュニアオリンピック大会で決定
イ　2011ユース代表合宿について
1/4 ～ 8にかけてオーストリアより講師を招請して東京で開催
選手20名は、ＪＯＣジュニアオリンピック大会で選考
※スポーツ振興基金助成事業
ウ　2011リード・ワールドカップ印西大会について
・2011年秋の開催に向けてＩＦＳＣに立候補中
⑼指導委員会
7月25日㈪　出席者12名
ア　スポーツクライミング上級養成講習会の報告
6/19 ～ 20　甲府市、参加者９名
イ　登攀技術研修会について
ウ　指導常任委員事前研修会について
エ　スポーツクライミング上級養成講習会（福井、宮城）について
オ　講師養成講習会について
カ　主任検定委員の認定（大山、富士山）について
大山合格者：8名
富士山合格者：4名
キ　指導常任委員の任務分担について

2.その他の重要事項

（6月10日～ 7月7日）

［報　告］

⑴スティーブ・ロング氏表敬来局
6月10日㈭
⑵スティーブ・ロング氏帰国
6月11日㈮
⑶㈶自然公園財団平成22年度第1回理事会　6月11日㈮
於：法曹会館　田中会長
⑷平成22年度都道府県体育協会指導者育成事業事務担当者会議
６月11日㈮
於：岸記念体育会館　蛭田、瀧本常任委員、中川事務局員
⑸青木半治　お別れの会　６月11日㈮
於：ホテルオークラ東京　尾形常務理事
⑹ＪＯＣ総務委員会　６月15日㈫
於：岸記念体育会館　尾形常務理事
⑺㈶日本体育協会平成22年度第１回評議員会　６月16日㈬
於：品川プリンスホテル　内藤副会長
⑻第13回秩父宮記念スポーツ医・科学賞表彰式・受賞祝賀会　６月16日㈬
於：品川プリンスホテル　内藤副会長
⑼㈳日本アルパインガイド協会設立報告・懇親会　６月16日㈬
於：新宿住友ビル47Ｆ　本木副会長、永井、尾形常務理事
⑽伴野栄子・元事務局員逝去（享年76歳）　６月16日㈭
⑾ISMF総会　６月17日㈭～ 20日㈰
於：オーストリア・ザルツブルグ　笹生常任委員
⑿国際委員総会・海外遭難対策研究会　６月19日㈯～ 20日㈰
於:栃木･日光市交流促進センター
本木副会長、青木常務理事
⒀公認スポーツクライミング上級指導員養成講習会　６月19日㈯～ 20日㈰
於：山梨・小瀬スポーツ公園
内藤副会長、永井、寺内常務理事
⒁第１回全国高校生クライミング選手権大会の㈶全国高等学校体育連盟後援名義の使用について承認の回答着信　６月21日㈪
⒂「山の日」制定協議会　６月25日㈮
於：労山事務局　本木副会長、尾形常務理事
⒃遭難対策委員総会　６月26日㈯～ 27日㈰
於：神奈川大学箱根保養所　西内、尾形常務理事
⒄第12回日本ワールドゲームズ協会総会　６月28日㈪
於：海洋船舶ビル10Ｆホール
尾形常務理事
⒅平成22年度全国山岳遭難対策協議会幹事会　７月５日㈪
於：文部科学省　西内常務理事、中川事務局員

3.議　事

⑴平成22年度６月常務理事会議事録の承認について（１字加筆で承認）
⑵リード・ワールドカップ印西大会2011の開催について（提案通り承認）
⑶公益社団法人への移行認定に向けた定款と細則の変更案について（継続審議）
⑷報告事項
ア　平成22年度公認スポーツ指導者表彰候補者の推薦について
堤信夫（東京）、渡辺公二（鳥取）、原秀樹（徳島）
イ　50周年記念事業について
エ　会計月次報告
ウ　平成22年度自然公園指導員被表彰者の決定について
植草勝久（千葉）
オ　「山の日」制定協議会の報告
カ　平成22年度専門委員会常任委員について
キ　平成22年度国体ブロック助成事業について
ク　2010年選手派遣結果と今後の予定
ケ　「山岳自然環境でのトイレ対策推進」に関する要望書について
コ　平成22年度中高年安全登山指導者講習会の開催要項について
サ　「登山と健康」（国内登山編・海外登山編）のリーフレットの発行について
シ　国体山岳競技規則集改訂版の発行について

4.役員等の派遣について

⑴平成22年度全国山岳遭難対策協議会　７月16日㈮
於：国立オリンピック記念青少年総合センター　内藤副会長、尾形常務理事、中川事務局員
⑵「山はみんなの宝！全国集会」
７月22日㈭
於：ＴＫＰ虎ノ門ビジネスセン

50th Anniversary JMA

成功させようＪＭＡ50 周年記念

ネパール・ヒマラヤ
クーンブ山群　三大峠トレッキング22日間

2010 年 10 月 18 日㈪～ 11 月 8 日㈪

ナムチェバザールからイムジャコーラ沿いにチュクンへ。
そこからはローツェ南壁の雄姿を目前に迫ります。チュクンから１つ目の峠「コンマラ」へ。コンマラを経て「カラパタール」へ登頂すれば、そこはエベレストの展望台。世界最高峰サガルマータの堂々たる姿が望めます。カラパタール登頂後は、２つめの峠「チョララ」を経て、ヒマラヤの山々が一望出来る「ゴーキョピーク」へ。最後は、ロールワリン山群が一望出来る『レンジョパス』を経てルクラまで戻ります。
クーンブ山群を堪能出来るダイナミックなトレッキングです。

【参加要項】
費用　498,000 円（燃油特別付加運賃 18,000 円）
※上記の他、以下が必要です。
成田空港使用料：2,540 円
ネパール空港税：1,695 ルピー
香港保安税：66 香港ドル
ネパール・ビザ代：9,200 円
海外旅行傷害保険料：任意額
お一人部屋追加代金：19,000 円
※上記の空港税、燃油特別付加運賃は 2010 年７現在の料金です。

締め切り
9月15日

ター　田中会長、本木副会長、長谷川常務理事、松隈常任委員

⑶50周年記念事業「ザ・植村直己・デー」　７月24日㈯
於：学術総合センター・一橋記念講堂　田中会長、本木副会長、青木、尾形常務理事

⑷平成22年度全国高体連登山大会開会式　８月6日㈮
於：霧島市牧園アリーナ
田中会長、神﨑副会長

⑸UIAA医科学委員会　８月8日㈰
於：ペルー・アレキパ　堀井常務理事

⑹50周年記念「みんな集まれ！ジュニア登山教室」　８月９日㈪～ 12日㈭
於：国立立山青少年自然の家
田中会長、本木副会長、西内、仙石常務理事、大西、篠原、佐伯常任委員

⑺ルートセッター全国研修会　８月9日㈪～ 11日㈬
於：南砺市桜ケ池ＣＣ　寺内常務理事

⑻第13回ＪＯＣジュニアオリンピックカップ　８月13日㈮～ 15日㈰
於：南砺市桜ケ池ＣＣ　田中会長、北山常務理事

５.報告　⑴自然保護指導員の承認
埼玉　１広島　９
山梨　４

⑵指導員の認定承認
［主任検定員］
西村良信、須藤英司、方山丈生（以上兵庫）、江本正彦（山口）、清家誠、堀内輝章（以上広島）、石川順一（大阪）、原秀樹（徳島）、村田健治、古畠俊彦（以上長野）、中山秀樹（愛知）、藤木晴夫（北海道）　以上12名

編集後記

「登山もクライミングもあきらめないでがんばれば、なんでもできることが分りました」50周年記念ジュニア登山教室に参加した小学４年生の感想です。

雷雨に見舞われた立山登山、初のクライミング体験、カルデラ博物館見学など目を輝かせて取り組んだ29名の子ども達と、充実の４日間でした。

（広報　本木　總子記）

HANDY GPS RECEIVER & LOGGER ATLAS® ASG-10
販売価格 18,900円(税込)

正確な位置情報があなたを助ける！
●３つのセンサー(加速度・方位・気圧)で正確な位置・移動情報を表示
●事前プランニングで楽しさ倍増！
●軌跡表示で目的地に誘導
●23種の多彩な表示項目

株式会社 ユピテル　〒108-0023 東京都港区芝浦4-12-33
TEL 03-3769-2525　FAX 03-3769-2520
お問い合わせ先：アトラス事業部　山下まで
https://atlas.yupiteru.co.jp
※ご購入は弊社ホームページからアトラスクラブに入会(無料)し、直接購入もできます。

登山月報　第 497 号

定　価　100 円（送料別）
予約年間 1、200 円送料共
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　平成22年８月15日
発行者　東京都渋谷区神南 1の1の1
岸記念体育会館内
社団法人日本山岳協会
電　話　03 － 3481 － 2396
ＦＡＸ　03 － 3481 － 2395